主日の福音 2026/4/5(No.1408)

復活徹夜祭（マタイ 28:1-10）

わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい

主の復活おめでとうございます。今年の聖なる一週間を貫くテーマとして中田神父が選んだのは、「ラザロ、出てきなさい」そして「ほどいてやって、行かせなさい」でした。そして今日、主イエスは復活し、人類を縛っていた罪と死の縄目を解いてくださいました。主は決定的な働きをなさいましたから、あとは私たちに「ほどいてやって、行かせなさい」という使命を託そうとされます。一人ひとり、復活の主が託そうとする使命を持ち帰ることにしましょう。

マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行きます。そこで見たのは稲妻のように輝き、雪のように白い衣をまとった天使でした。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになったとあります。二人の女性にとっても、同じくらい恐ろしくなったと考えて良いでしょう。そこで天使が「恐怖」でぐるぐる巻きにされた二人の女性を「ほどいて」あげます。

「かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。」（28・6）「恐怖」からほどいてもらった女性たちは、「恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走っていった。」（28・8）彼女たちには使命が託されました。最終的にもう一度、イエス様からも同じ使命を託されますから、本当の意味で使命を託すのは常に復活したイエスということになります。

この時点で弟子たちはどうしているのでしょうか。日中のミサの福音朗読を先取りすると、どこかにとどまっていたようです。いつでも動けるように「待機」していたのではなく、弟子たちも恐れに捉えられ、縛り付けられていたのです。それを、婦人たちが「ほどいてやって」ガリラヤへ行くように促します。エルサレムからガリラヤまで 170km 以上ありますが、当時は徒歩で数日を要する距離でした。弟子たちはまだ、イエスの「ラザロ、出てきなさい」という叫びを受け取っていないので、婦人たちから促されただけでは足りませんでした。

徹夜祭の朗読で登場する婦人たちは、番兵が恐怖のために死人のようになる場面でも逃げ出しませんでした。復活したイエスから、いちばん最初に「ラザロ、出てきなさい」という決定的なことばをかけてもらうのもうなずけます。いざとなったときの女性の強さを、復活したイエスはよく知っていたのです。最初に墓を訪ねています。

託された使命は驚くほどのものではなかったかもしれません。しかし確かに、真っ先に使命を託されたのです。お集まりの皆さんの半分は女性だと思います。復活したイエスは、先に使命を託そうとしておられます。喜んで引き受ける準備はできているでしょうか。

男性の代表として登場する弟子たちも、恐れに捉えられていますが、復活したイエスに開放してもらってからは数日の道のりをものともせずガリラヤに向います。時間がかかる使命を託されて、それを果たす

心の準備はできているでしょうか。170km 先まで歩くのに例えられるような、使命を果たし終えるまでの忍耐心、やる気は備わっているでしょうか。

中田神父は二度、エルサレムからガリラヤまで歩くような徒歩巡礼を体験させてもらいました。上五島に赴任していた時代、40 代後半の頃です。同じ上五島に、福岡教区の今村教会に派遣されていた先輩が青砂ヶ浦教会に赴任していて、「大浦教会から今村教会まで、徒歩巡礼してみないか」と上五島の司祭全体に呼びかけてくださったのです。

今村のキリシタンたちは 1865 年、大浦で信徒発見の出来事が起こってからも、まだ信仰を公にできないでいました。今村に、キリシタンが潜んでいるらしい。その調査に、かつて派遣された人々がいて、1867 年、信仰を守り継いだ人々を発見して大浦に帰ってロケーニュ神父にそのことを報告したのでした。私たちは事前トレーニングをしばらく積んでから、三日かけて 136km の道のりを歩きました。実際には一部分電車にも乗りました。

今村エリアに入ると周りはたくさんの田んぼや畑があり、そこにはっきり今村教会が見えます。教会は見えるのに、いくら進んでもたどり着かないのです。体はヘトヘト、タクシーでも呼んで運んでもらいたい気分でした。しかしいよいよ近づくと、今村教会で私たちのために信徒の方々が小旗を振って待ってくれていたのです。

勇気百倍、力を今一度込めてたどり着き、皆で感謝のミサをささげました。徒歩巡礼の使命を与えてくれたのは直接的には先輩神父様でしたが、その使命の完成のために、はじめから終わりまで、復活したイエスがともにいてくださった素晴らしい体験でした。

「ラザロ、出てきなさい」と大声で叫ばれたイエスは今や復活し、私たちに使命を託そうとしておられます。「ほどいてやって、行かせなさい。」それぞれ、使命を託され、いろいろな場所に行くのです。家庭に、職場に、社会に。中には、何百キロも離れた場所で、その使命に生きる者となります。

これから一人の中学生が堅信の秘跡を受けます。今、自宅から 150km 離れた場所で、復活したキリストを証しする使命を託されます。堅信の秘跡は、証しの力を授けてくださり、聖霊の賜物で満たしてくださいます。今日お集まりの皆さんも、復活を祝い、復活を証しするために家から出てきましたが、150km かけてここに来ている人が他にいるでしょうか？この勇気ある堅信受堅者を、私たちは祈りで支えてあげましょう。聖霊の七つの賜物が、豊かに注がれますように。

復活の主日(日中)(ヨハネ 20:1-9)